

【訃報】



京都で「環境と文化の会」を主催され、1991年の学会設立から長年会員及び編集委員として、当学会の活動にご貢献頂いておりました重慶医科大学名誉教授溝口次夫先生には、平成21年12月18日に75歳で逝去されました。

慎んでお知らせ申し上げますとともに、ここに心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

ここに、京都大学の同期生で、現在琵琶湖環境科学研究センター長の内藤正明先生の「追悼文」を掲載させていただきます。

「溝口次夫氏追悼の辞」

溝口さんとは大学同級生として20歳から70を越える今日まで、実に半世紀にわたり仕事と生活の両面で近い関係できたことを改めて思い出しています。彼は卒業して直ぐに大阪府の公害行政に飛び込んで、当時深刻化していた大気汚染対策に取り組みました。さらに、発足当初の日本でも最初の本格的な府の「公害監視センター」に移り、研究と行政の間をつなぐための仕事に従事しましたが、その時に京都大学の助手をしていた私と一緒に、大気汚染の予測モデルを開発したのが、二人が共同でした最初の仕事でした。

勝負事が得意で強かった彼は、必ずしも勤勉な学生には見えず、教室より雀壮の出席率がよかったのではないかと記憶しています。しかし、彼が大きく変わった契機は結婚だったと、私には見えませんでした。ということで、大阪府での仕事は実に先取的でかつ優れたものであり、その業績は大阪府の大気保全行政の中でも高く評価されたはずで。

その後（昭和49年）に私が、新たに発足した「国立公害研究所」に移り、その創設に関わることになりましたが、その時に「行政と研究の橋渡しをする、研究企画官という役目にふさわしい人がいないか」と幹部に尋ねられて、すぐに溝口さんを推薦しました。直ぐに決まって、その後の15年間を二人は「つくば研究学園都市」という名の“文化果つる地”で、仕事を一緒にすることになりました。その間は同じ官舎に住んで、一つの家族のように暮らした感じでした。双方の長女の結婚式には、互いに主賓を勤めたのも昨日のこのことのように。

研究所で企画官の仕事をする内に、大気環境部長が溝口さんを計測室長にスカウトしたいと申し出があって、「どうしたものかな」と相談がありました。「部長が高く買っているのは確かだから、安心して移ったらいいのでは…」とアドバイスしました。その後は室長として、これまでの現場経験も十分生かしてとても良い仕事をされました。その仕事が評価されて、今度は厚生省・公衆衛生院の大気部長に、ということになりました。私から見るとどちらかという地味な仕事ぶり人柄に見えましたが、次々と上の人の目に留まって、大事なポジションにスカウトされていくというのが、溝口さんの研究者生活でした。見る人には、ちゃんと見えていたのだということでしょう。

公衆衛生院の仕事上も、海外との共同研究や外国からの研究者受け入れなどで、国際的な接点が沢山出来たのだと思います。その一つが、重慶という深刻な大気汚染の地であって、そこでの活躍によって重慶医科大学が名誉教授というポストを用意して、溝口さんに期待を掛けていたことを、私は不明にして通夜の席で初めて知りました。「特別に頑健とは言い難い体で、そんな大変なところまで何度も行って大丈夫なの？」と本人には時々後ろ向きなことを言いましたが、そんな言葉には耳も貸さ

ずに、積極的に出かけていたのは相手側の期待がそれほど大きく、断れないという背景もあったのかと改めて知りました。

その後、溝口さんは定年になってから京都に帰り、佛教大学の社会学部教授ということで、畑違いのようではあっても、これまでの実務経験も生かして、今度は学生の教育に熱心に取り組んでいました。「最終的に京都に帰って、しかも自宅近くのいい大学にいったのは、本当にラッキーやな」と言うのと、「そうや。それに学生達もかわいいところがあって、待遇も悪くは無いし…」という返事でした。「それは運がいいな。羨ましい。」と言うと、「うん」とただ一言返事がありました。しかし考えてみると、どこにいても全く手抜きというものが無く、できることを精一杯着実に進めていく仕事ぶりが、その結果をもたらしたのであって、決してラッキーではなかったことを、最後の段階で改めて認識しました。自分も後どれぐらい仕事ができるか分かりませんが、溝口さんの仕事ぶりを、この期に及んで再認識することができたのは、残りの人生で少しでも良い仕事をせよという神の啓示と受け止めています。

相前後して私も京都大学に戻り、その7年後に定年を迎えましたが、そのとき直ぐに溝口さんが佛教大学に来ないかと誘ってくれました。今回は昔とは逆に、私が引っ張ってもらって、ここでも同じ職場で仕事をするようになりました。しかし、つくばでも京都でも同じ職場で長く一緒にいても、仕事での接点はほどほどで、家同士での付き合いの方が密でした。そのお陰で、ある時「溝口さんは奥さんにこれまで一度も、嫌な思いにさせるような言葉を言われたことがないそうだ」と家人が聞いてきました。「それに引き替え…」ということで、その後何度となくそのことで矛先がこちらに向いて、迷惑を蒙ったこともありました。

これまでの仕事に対して5年前に勲章が授与されました。我々同期生で一人だけなので、やっかみも半分で、「賞金も無いのに、なぜ勲章なんかもらったの？」と、同級生として遠慮もなく訊ねたのですが、その答えは、「長い間苦勞を掛けた家内を一度皇居に連れて行ってやりたかったから」という返事でした。いつもなら直ぐに突っ込みを入れるはずでしたが、その時はただ、「ああ、そうかー」という間の抜けた返事をしたものでした。これは、もう一つの忘れがたいやり取りでした。

告別式当日の悼辞の中で、「安らかに眠ってください」とはどうしても言えないと申しました。他の人から見たら、古希を越えた者同士ならもういいだろうと思われたかもしれませんが、やはり今でも受け入れがたい思いです。その一つの理由は、最後の見舞いに病院を訪れた時、「環境と文化の会」という検討の場を長年自らの費用で開催してきたこと、そして病院に居ながらも間近に迫った今年の講演会を大変気にしていたことを初めて知ったことでした。社会に対してまだまだ何かをしたい、し残しているという、ご本人の強い気持ちに気付いたことでもあります。そこで思わず、「次は声を掛けてもらっても…」と、初めて自分で売り込んだものです。しかし、いまは叶わぬこととなりました。

行政職、研究職、教育職と多様な仕事を、その時々精一杯し遂げつつ、家庭のこともずっと大切に護ってきた溝口さんの生涯を改めて思い返してみると、本当は思い残すことは少ないのかもしれない、と思うことにして、ここで改めて「安らかに眠ってください。」と、自らの心を鎮めたいと思います。